

# 職業カースト・クムハールによる土器制作

## ～北インド ジャイプルの事例から～

脇園賀子

北九州市立大学文学部人間関係学科

### 要旨

『職業カースト・クムハールによる土器制作 ～北インド ジャイプルの事例から～』は、インド北部ラジャスタン州首都ジャイプルにおけるクムハールカーストの土器製作技術や道具、販売方法、経済状況などについて述べる。クムハールにまつわる過去の文献では、金属製品、陶磁器、プラスチック製品の急速な普及により、土器文化に変化が見られると報告されている。本稿では、電動ろくろの使用が広がりつつあることや、土器に施される装飾に対しての人々の意識を報告した。クムハール自身が、新しい生活スタイルにあわせた新製品をデザインするという土器を作る側の工夫のほかに、使う側のヒन्दゥー教に基づいた宗教心が土器文化の継続を可能していることを論述する。

### 目次

はじめに	3-5 製品
1. 地域概要	3-6 販売
2. ムハールにまつわる神話	3-7 副業
3. クムハールの仕事	4. 考察
3-1 道具と材料	5. 結論
3-2 土器の作り方	註
3-3 焼成	参考文献
3-4 絵付け	

#### はじめに

インドには、鍛冶屋、皮細工や調髪などの様々な職業カースト(註1)が存在する(Krishnan 1989)。

クムハール(Kumbhar)は、この職業カーストのなかでも土器を作るカーストである。彼らは、日常用品や儀式に不可欠な製品を製造する。しかし近年の南アジアにおける土器文化は、金属製品、陶磁器、プラスチック

製品の急速な普及により、都市部のみならず農村部においても変化がみられるようになった。そのため、一般的にインドにおける土器製作者の社会的・経済的状況は厳しいとされている。外的要因のみならず、陶工の人口文化、土器製作に用いる道具や技術の後進性、販売市場の問題、職業観の変化など土器製作に携わる陶工そのもののあり方に関わる内的要因にも変化が

みられることが報告されている (Saraswati 1966)。近年では、関根がインド西ベンガル州においての実地調査を行い、土器の種類や製作技術について報告している (関根 2001)。

本稿の考察では、クムハールの家族構成・土器製造の技術・販売方法・生活状況を、Saraswati などによって書かれた、クムハールに関連する文献と比較しながら、クムハールの土器製作や販売法を調査することを目的とする。2003 年8月中旬から9月の末の約一ヶ月半にわたり、ラジャスタン (Rajasthan) 州の首都であるジャイプル (Jaipur) 市内とその周辺約 11 km で、本論文の資料のための調査をおこなった。

## 1. 地域概要

ラジャスタン州の首都であるジャイプルは、インド共和国の首都デリー (Delhi) から南西 262 km に位置する。ジャイプルは、ジャイ・シン2世 (Maharaja Jai Singh) が 18 世紀初頭に作った城塞都市であり、旧市街は計画都市のため、整然と区画がされている。町の建物が赤砂石で作られ、町全体は赤色をしていることから「ピンク・シティー」と呼ばれることもある。人口は 5,252,388 人 (男性 2,769,096 人、女性 2,483,292 人) で、ヒンディー語の方言である Rajasthani が一般的に使われる。主にヒンドゥー教とイスラム教が信仰されている (Census 2001)。気候は6月から8月にかけて雨期、9月から5月にかけては乾期に分かれており、一年通しての最高気温 41℃、最低気温 8℃ となっている (Vardhman's Destination Guide Jaipur City)。今回は、このジャイプルの市内から東北南西約 11 km 範囲以内を調査地とした。

## 2. クムハールにまつわる神話

クムハールの社会的地位は地域によって異なるが、一般的にはバラモン (僧)、クシャトリア (王族)、ヴァイシャ (庶民)、シュードラ (隷民) の階級の枠組みのなかで、シュードラ (Shudra) とされている。カースト制の浄・

不浄観念に基づくと浄の部類に入り、不可触民 (註 2) よりは上位で、他の職業カーストと同じ地位としてみなされている (Saraswati 1966 1979)。

クムハールの社会的地位を語る上で重要なのは、クムハールのカーストの地位関係以外に、クムハールにまつわる神話が挙げられる。クムハールが土器作りに使用するロクロは結婚をあげるカップルに崇拜される。また、クムハールが製作した儀式用の壺も結婚式には欠かせない。ここでは、クムハールが結婚式に欠かせない存在とされる理由の3つの神話を取り上げることにする。

(1) 昔々、シヴァ神 (Shiva) がサティー神 (Sati) と結婚する際に、自分の数珠の玉を一つ取り出し、男と女を作った。そしてこの男と女に壺を作るように命令した。彼らがのちのクムハールカーストになった (Singh 1977)。

(2) クムハールは、ブラフマン (Brahma)、ヴィシュヌ (Vishnu)、シャンカ (Shankar) の祝福によりこの世に誕生したと言われている。

ブラフマンは魂 (kala) を、ヴィシュヌはロクロ (Chakra) を、そしてシャンカは形 (swarupa) をクムハールに与えた。クムハールは誕生後、これらの三人の神から授かったものから、クンブツ (Kumbha) といわれる儀式用の水入れを作った。これがクムハールの名前の由来だとされている (K.S. Singh 1995)。

(3) 最高の造物主であるビシュワカルマ (Viswakarma) は、それぞれの神の体から少しずつ魂を集めて、最初の壺を創った。シヴァ神がサティー神と結婚する際、結婚式に必要な数の壺がなかった。つまりたった一つの壺だけでは、世界を満足させることができなかったのだ。そこでシヴァ神は壺を製作するクムハールカーストを創ったという (Jane Perryman 1995)。

このように、クムハールにまつわる神話は文献に多く記されている。実際に、デリー郊外の村々で、村人それぞれには先祖代々受け継がれている専属クムハールがいることを聞いた。結婚式の際は、新婦やその親戚が専属クムハールのところへ訪れるそうだ。ジャプールやデリーでは、結婚式の一部としてチャック・プージャ(Chak Puja)が行われる。チャックはロクロを意味し、プージャとは神々への礼拝を意味する。

新婦はクムハールの家に訪れ、クムハールが土器製作に使用するロクロの上に乗る。クムハールはそのロクロを7回転する(Saraswati 1966)。クムハールは、新婦に結婚式で使用するクンパを贈り、新婦はお返しに金銭、サリー、穀物をクムハールに贈る。ロクロの上におかれた土が、ヒンドゥー教徒の信仰するリング(男性器)をロクロがヨーニ(女陰)を象徴するという報告もされている(Sawaswati 1978)。チャック・プージャは、結婚する女性の豊饒性と夫婦間のよい関係を祈ったものであるようだ。

結婚式の際に、クムハールが作る製品が使用され、ロクロが崇拜の的とされているのは、神話の中でクムハールが、神によって創られた存在として描かれていることが一つの理由として考えられる。

次章では、クムハールが実際にどのような製品を作っているのか、また製品を作成に必要な道具について述べていく。

### 3. クムハールの仕事

前章で述べたように、クムハールが作る製品や、土器製作に欠かせないロクロは結婚式において重要な意味をもつ。ここでは、製作する製品の種類でクムハールを分類する。

Gurcharan Singh によると、モスリム系の陶芸が導入されて以来、インドの陶器を作る者たちは以下の2つに分けられる。

- (A) 茶・黒の土器の壺を作るクムハール
- (B) 釉薬をかけたタイルや壺を作る者

(A)のクムハールのなかでも、壺などをつくる者と、動物の形などの置物を専門に作っている者の2通りがある(Gurcharan Singh 1979)。この調査では、(A)に属するクムハールの中でも、特に壺を作るクムハールに焦点をあてる。

ジャイプルのM・LRoadにあるNatha ブルーポタリー(Blue Pottery)(註3)のワークショップの職人として働くクムハールや、その知り合いを中心の計5世帯を対象とし、土器の製作技術・販売方法・経済事情について、製作作業に参加しながらインタビューをおこなった。加え、会話の中で聞くことが出来たものを文章にまとめた。中でも[1]Nahri Ka Kankaのクムハールと、[2]Ramberg Bazaarのクムハールは家族構成・分業についても詳しく述べる。以下の5世帯が対象となったクムハールである。それぞれのクムハール自宅周辺の様子を簡単に説明した(図1・図2)。

#### 3-1 道具と材料

前章で述べたように、クムハールが使用するロクロは結婚式に欠かせない。ここでは、上記で述べた5世帯のクムハールが製品作りに必要とする道具や材料について、説明する。

##### 手動ロクロ

ロクロはセメントで作られた手動のものである。円盤の縁近くの穴に、長さ約60~80cmの棒を入れ両手で回す。ロクロを回転させつために使う棒には、木の枝をきれいにけずったものを用いる。ロクロの穴に棒を入れやすくするために、先端は細くなっている(写真1)。

円形台の支えとして、セメントで固定された木製の回転軸が取り付けられている(写真2)。ロクロの回転を良くするために木製部分には、バターや植物性油がつけられている。ロクロは、反時計回りに回される。円盤の上に土をのせて水引挽きすると、回転力を失うため、何度も回し返す必要がある。

[3]のクムハールはロクロを回転させる前に、ロクロに

対して手短なお祈りをする。ロクロには幸福を意味するしるしのスワスティカ(Swastika) (註 6)が描かれている(写真3)。ロクロを回すのは主に男性の仕事とされ、女性には主に、土こね・材料の準備・窯入れの手伝い・釉薬つけ・絵付けを行なう。このように男女の分業が成り立っている。



(写真1) 円盤の穴に挿しやすくするために先端を細くした棒 (Jai Singh Pura Khor にて)



(写真2) セメントで固定された手回しロクロの木製回転軸 (Jai Singh Pura Khor にて)



(写真3) スワスティカが描かれた手回しロクロ円盤の縁近くに、棒を挿す穴が3個ある (Jai Singh Pura Khor にて)

#### 電動ロクロ

電動ロクロ(写真4)は、手回しロクロの円盤を回す労力や、それに費やす時間が節約できるため、生産性の向上が望める。クムハールによる電動ロクロの使用は、デリーで 1989 年の時点で確認されている (Krishnan 1989) が、ジャイプルにいつ導入されたかは定かではない。



(写真4) 電動ロクロ (Ramberg Bazaar にて)

ジャイプルのクムハールの間では、電動ロクロの使用は一般的ではないが[2]や[5]のクムハールは電動ロクロで土器製作をしていた。[2]のクムハールは約6年前から電動ロクロを使っているという。[2]の電動ロクロを使用するクムハールに、なぜ他のクムハールは便利な電動ロクロを使用しないのかと尋ねたところ、「かれらは、新しいものに挑戦するには、年をとりすぎている。」と言っていた。

[5]のクムハールによると、電動ロクロは 2003 年初めに Rs3500 で購入したものだという。この一つの電動ロ

クロを四男と共有している。土器製作には電動ロクロを使用しているが、もともと使用していた手動ロクロは、結婚式用のチャック・プージャ用に保管しているそうだ。

#### アトリー

アトリーとは、皿のような窪みのある叩き台である(写真5)。叩きで整形する際に、製品の固定・形つくりのために用いられる。製品の大きさにあわせたサイズのアトリーが使用される。

#### ピンディー

ピンディーとは当て具である(写真5)。叩き板で壺の外壁を叩くとき、当て具で壺の内壁を支える。当て具は、持ちやすいように握りがついている。写真にあるピンディーは石で作られているが、土でつくられた土器のピンディーも見られた。石のピンディーは長持ちするため、土器のピンディーより石のものがよく使われるようになっている(Sawaswati 1966)。



(写真5) 手前左2つ タバ(叩き板) 手前右 ピンディー(当て具) 中央 アトリー(叩き台) (Nahri Ka Kankaにて)

#### タバ

タバとは叩き板である(写真5)。ロクロで成型後、製品を叩いて拡大するために用いられる。マルカを作る際は、上記の当て具(ピンディー)と叩き板(タバ)を用いて叩きながら成形する。これらの道具を使用しマルカを叩くことで、素地の空気が追い出され薄く硬い製品が出来上がる。叩き板は、素地の表面を整えるためや模様をつけるために利用されることもある。製品の特徴にあわせて、形や大きさが違うタバがある。[1]のNahri Ka Kankaのクムハールは、サイズの異なったアトリー3個、ピンディー3個、タバ5個を所有していた。

#### 本体の土

土の粘り具合を調節するために、乾燥した土と、雨ざらしにして貯蔵された土を2、3種類混ぜ合わせて本体を作る土にしていた(写真6・7)。乾燥した土は、目を細かくするために篩いにかける。粘り具合を調節した土は足で踏んで荒練りする。荒練りをした土は、麻バックの上で手と足の両方を使ってさらに練り返す。このとき土から空気が抜ける。[1]のクムハールは 25km離れた村から、ラクダで運ばれた土を使用していた。土の値段は変動するらしいが、400kgでRs 175~200が相場(註7)だという。400kgの土を3日で使い切ることもある。目安として土400kgでラッシ-グラス(註8)が約2000個製作できる。ラッシ-グラスは、直径8cm、高さ約12cmのコップである。[3]のクムハールは自宅近辺で材料になる土を採取していた。



(写真6) セメントで固めた溝に貯蔵されている土



(写真7) 乾燥した土は篩にかけてから使用する

### パリヤ

パリヤは黒くもろい鉱石で、その形状から黒雲母であると考えられる。これを細かく粒子状したものが、マルカの表面に叩き込まれる。土の表面に叩き込まれたパリヤは、酸化焼成(註9)で金色に、還元焼成(註10)で黒色に変色する。

### ゲル(Geru)

黄土と思われる。焼成前に、この土を水で溶かしたものを乾いた製品に塗る(写真8)。

すべての製品にほどこされるのではなく、平皿などの特定の製品にのみ塗られる。この土を施した製品は、素焼き後に表面が赤く仕上がる。

### 燃料

製品焼成の際は、牛糞、木材が主な燃料となる。

【3】のクムハールは、女性がジャングルから切ってきた木材を燃料にしていた。【2】のでは、特に親族関係は見られなかった3人のクムハールが同時に窯作りを行っていた(図3)。サテナラインは購入した牛糞を燃料として利用し、残りの2人は新聞・古着を燃料として利用していた。普段は牛糞が利用されるが、雨期の長期化で牛糞を乾燥できなかったため木材・新聞・古着が代用品として使用された。



(写真8) 焼成前の製品に、スポンジに含ませた黄土を塗る様子 (Ramberg Bazaar にて)

### 3 - 2 土器の作り方

成形は前章で説明した道具や材料を使用し、以下の2種類の技能によってなされる。

- ・ロクロだけで作られるもの
- ・のロクロで大まかな形を作った後に、叩いて完成させるもの

一般的に、ラッシーグラスや貯金箱など小物は のロクロだけでつくられるが、マルカや平皿は のロクロでの成形後、各種道具を用いて(3 - 1 の道具を参照)叩いて完成する。

以下は、1 と のそれぞれの技能をまとめて説明する。

#### の手順

1. 手や足でこねた土の塊を、ロクロの中心に置く
2. 円形台を手で回す
3. ある程度円形台の回転に勢いをつけてから、円形台の穴に木の棒をいれ、木の棒をすばやくまわすことで、ロクロをさらに早く回転させる

4. 両手で土の塊を立ち上げる
5. 製品を作る
6. 製品によっては、長く伸ばした爪で製品表面に模様をつけることがある
7. 片手の小指に巻きつけた糸で、土の塊から製品を切り離す

一度ロクロをまわすと、その回転が続く約1分間で小さな壺が4～5個できる。平皿のような製品は、 の手順で作られた後、叩きの技法を使って形作る。平皿をロクロから切り離す際は、わざと皿の底面部に穴を残す。平皿を適度に乾かした後に底面を薄くするため、型崩れを防ぐことが出来る。手順は下の通りである。

8. 製品をロクロから切り離した後、適度に乾かす
9. 底面部の余計な土を取り除く
10. 製品をアトリーにのせる
11. 指で穴を埋めていく(写真9)
12. 土とピンディーがくっつかない様に、乾燥した牛糞の灰を振りかける
13. 穴が空いた底面部をピンディーでのばして、底の形を整える(写真10)



(写真9) 指で穴のある底面部を伸ばす (Nahri Ka Kankaにて)



(写真10) 叩き板の上に置いた平皿を、当て具で叩き伸ばす (Nahri Ka Kankaにて)

マルカも の手順で作られる。ここではマルカの作り方の手順を説明する。

#### マルカ作りの手順

1. 厚めの壺をロクロで作る(写真11)
2. 適度に乾かした壺の角と底面部分を、少し取り除く
3. 本体をアトリーの上に置き、全体に水を塗りつけ、本体にパリヤをまんべんなくまぶす
4. 右手にタバを、左手にピンディーをもつ。ピンディーを持っている左手を壺の中に入れ、ピンディーを壺の内側にあてる(写真12)
5. ピンディーをあてている部分を、外側からタバで叩き上げる。力を調節しながら、壺の上から下へと叩く工程を何度か繰り返す。叩く場所を調整しながら、壺を広げる
6. ある程度壺が広がったら、マルカをアトリーの上でくると回しながら形を整える。
7. 完成したマルカは、半分に割ったマルカを支えにして乾かす

すべてのマルカは、ほぼ同じ大きさで完成する。1～6までの工程は1個につき約10分である。[4]のクムハールは一日に一人で約15個のマルカを作るという。



(写真11) ロクロから切り離し乾かした壺。この壺を叩きマルカにする (Amer Roadにて)



(写真13) 完成したマルカを、半分に割ったマルカにのせて乾かす (Amer Roadにて)



(写真12) 叩き台にのせたマルカ。当て具でマルカの内壁支え、叩き板でマルカの外壁を叩き締める。マルカの素地には水を塗った後にバリヤが叩き込まれる (Amer Roadにて)

### 3 - 3 焼成

先で述べた手順で作られた製品を完全に乾かした後、窯に入れて燃焼する。焼成の途中に雨が降ると、燃料と製品が無駄になるためかなり慎重に窯入れの日程を決定する。窯の作り方や、窯出しの様子は以下の手順で行われる。ここでは、ラッシーグラスや平皿などの小物を中心に焼成する窯の作り方を説明する。

1. 地面が湿っている時は、地面の上を乾燥させた牛糞の灰で覆う。または、地面の上にアルミ製の板を敷く
2. 一部が欠けて使えなくなったマルカやその破片を窯作りの土台とする(写真14)
3. 窯の土台としたマルカの円の内側に、牛糞または廃材を敷き詰める(写真15)
4. 敷き詰めた牛糞または廃材の上に、グラスなどの製品を置く(写真16)
5. 窯の中心部は、口を下にしたグラスを規則正しく積み重ねる。この時、火が全体に行き渡るように、空気



の通り道の煙突を確保することを意識する

6. グラスの周囲にも、さらに平皿などの製品を置く(写真 17)
7. その他の製品の口に、一つ一つに燃料を詰め込む(写真 18)
8. 窯の中心部に発火する(写真 19)
9. 再び牛糞、または廃材で窯全体を覆う(写真 20)
10. 熱を逃がさないように真ん中の煙突を残し、アルミ製の板で窯全体を覆う。約4時間で焼きあがる(写真 21)
11. 翌日、アルミ製の板を取り除き、窯から製品を取り出す(写真 22)

低温のために出来る不良品の黒色の品物は次回の焼成で再び焼かれる。

このタイプの窯は一回の焼成ごとに地面の上に作り、燃焼後は取り払われる。燃焼する製品の量に応じて、窯の大きさは自在に変えることができる。



(写真14) 湿った地面に牛糞を焼いた際の灰を敷き、その上に窯用のマルカ並べる (Ramberg Bazaarにて)

#### マルカの窯

マルカの焼成には、レンガ作りの窯を使用することが多い(写真 23)。レンガ作りの窯は、上記のタイプの窯と異なり常設である。焼き方には酸化焼成と還元焼成がある。どちらの焼き方も同じ窯で行なう。還元焼成は、陶器の破片で窯を覆った上に、煙を逃がさないように

土を乗せてから水をかけることで製品が黒くなる。タイヤから出る黒い煙で製品を黒くする方法もある。



(写真 23) マルカを焼成するレンガ作りの窯 (Amer Roadにて)

#### 3 - 4 絵付け

絵付けは主に女性の仕事であり、焼成前・焼成後に行われるものの2種類がある。焼成前に行われる伝統的な方法は、焼成前の絵付けに使用する原料の入手が困難になったこと等が原因で消えつつある (Saraswati 1966)。

[1]のクムハールは、素焼き後の結婚式用のガラスに、絵の具を使って鮮やかな装飾を施していた(写真 24)。焼成後の絵付けは、多彩な色で装飾ができるという利点がある。儀式用の壺は、焼成後に炭酸カルシウムで白の装飾を施される(写真 25)。

ラジャスタン州の土器製作者は、「かつて人々は、絵付けの施された壺を高額で購入していたが、最近では、壺の絵付けが優れたものでも簡素なものでも同じ価格でしか売れない。」と嘆いたという(Saraswati 1966)。

デリーとジャイプルでの人々のマルカに対する意識

調査によると、マルカの購入基準にマルカの装飾性は重要視されていない。人々はマルカを数ヶ月ごとに買い換えるものとして捉えているためか、その装飾性に対してはそれほど関心をよせていない(脇園 2003b)。クムハール自身が、絵付けを好んでしているのではなく、購入者の中に壺の絵付けの必要性を言い張る者がいるため、クムハールは土器に装飾を施し続けているようだ。



(写真 24) 焼成後に装飾を施したカラス (Nahri Ka Kanka にて)



(写真 25) Nahri Ka Kanka の土器製品の専門店で販売されている儀式用の壺

### 3 - 5 製品

土器製品の作り方は前述したとおりである。ここでは、実際に庶民の生活の中で利用されている土器の名前、値段、使用法を大まかに説明する。

調査は、比較的交通量・人通りとも多い Nahri Ka Kanka という通りにある土器専門店である(写真 26)。

調査対象の店は Prajapati 夫婦によって営まれている。数年前までこの二人も土器を製作していたが、窯の煙について苦情がでたため製造から販売へと移行したという。店にはイスラム教徒とヒンドゥー教徒両方が訪れる。ここでは、Nahri Ka Kanka の土器製品の専門店にある製品の名前と値段を説明する。特に、調査期間中に多く作られていたディーパックと儀式に利用されるカラスについては、どのように使用されるのか詳しく説明する。なお、ここで販売されている製品は Namarugaru という村からトラックに積み運ばれる。



(写真 26) 店頭に製品を並べて販売する Nahri Ka Kanka の土器製品の専門店

### ディーパック

ディーパックは、ヒンドゥー教徒が寺参りする際や、家に奉っている神に祈りをあげるときに使用される(写真 27)。色々な素材のディーパックがあり、土器のディーパックの種類も豊富である。これらのなかには、クム

ハールが新しく考案したデザインもあった[1]のクムハールのカリ・デービーの長男は、去年新しいデザインのディーパックを考案した(写真 28)。この製品は大変壊れやすいため販売には至っていないのだが、伝統的な製品のみならず、クムハールが新しい製品のデザインを考案・製作・販売することがわかる。

土器のディーパックの値段は、クムハールから店に卸す値段が、100 個 10 ルピー、店では客にその二倍の値段の 5 個 1 ルピーで販売している。祭り前は値段が上がることもある。ディーパックは、ラッシーグラスなどと違ってこわれるまで使用される。

[1]のクムハールに、訪れた時期はディワリ(Diwali)(註12)の祭りが近かったことからディーパックの製作に力を入れていた(写真 29)。今年の雨季は例年よりも長引いたため、製品を焼くことができなかったという。この家には台所の他に寝室が4つ程あったが、部屋の隅には素焼き前の製品が山積みになっていた。デービー在住の25歳男性は、ディーパックの灯明について「キャンドルは何度も使えて便利だ。しかしディワリの主役は、やはり土器のディーパックだ」という。彼の家ではディワリのために約 200 個のディーパックを購入予定であった。



(写真27) プージャの際に使用されるディーパック



(写真28) 新しいディーパックとその製作者 (Nahri Ka Kankaにて)



(写真29) ディワリ前にディーパックを大量生産するクムハール (Nahri Ka Kankaにて)

#### カラス

土器のカラスは、結婚式の際7個使用されるという。土器のカラスは挙式後近くの川に流されるという話だったが、大事に家に保管しそれぞれに米、貴金属、穀物、砂糖、金銭を保存していることもある。

上記以外の土器製品に、子どもの玩具が挙げられる。

デリー在住の30歳前半女性は、幼い頃、土器の玩具で遊んでいたという。今回の調査では、土器の玩具で子供達が遊んでいる様子や、販売されているところは見られなかった。しかし、[2]のクムハールの一人が、子供の玩具用にチャパティ - を作るための台を、[1]のクムハールは小さなすり鉢を、販売用の製品の傍ら作っていた。

Shantha Krishnan によると、都市化や生活スタイルの変化の結果としてガムラ (Gamla) や花入れ、ランプなどに人気が集まるようになったという。このように伝統的に使用されていた製品に加えて、新しい生活にあわせた製品が生まれている (Shantha Krishnan 1989)。

### 3 - 5 販売方法

今回の調査で実際に見られた土器の販売法は、以下の3つであった。

- ・クムハールが自分の製品を自宅で販売する
- ・土器専門店やラッシー店に注文を受け、その分を卸す
- ・自分で作った製品を、大通りに製品を運び道端で販売する

[1]のクムハールは、完成した製品を M・I Road に多く点在しているラッシー専門店や、土器の製品を販売している。注文分の製品を自家用リキシャーに載せて運ぶ。自宅に販売するスペースがないため、自宅での販売ができない。上記の の販売法である。

[2]のクムハールの一人は、AMER ROAD のクムハールから購入した約 300 ~ 500 個のマルカを収納している。これらのマルカと、自分の製品両方を同時に販売している。販売場所は、家の前に加え、窯出し直後は大通り (Gata Gate) まで出て販売する (写真 30)。Champol Bazaar の土器の店に卸すために、自転車でも運ぶこともある。他のクマール製品を販売するクムハールの例はここだけだった。上記の . . . すべての販売法である。

[3]のクムハールは、家の前で製品を販売していた。

上記の の販売法である。雨季はマルカの需要は少なく、一日に2、3個の売上しかないが、暑さが厳しくなるとその売上は一日に20~30個にもなる。

このように、クムハールの製品の販売経路は様々である。

筆者は、土器専門店で製品を卸すより、クムハール自身が直接、客に販売するほうが利益を多く得られる印象を受けた。しかし実際は、クムハール自身が製品を販売するには、人手や時間がかかることや、クムハールが販売する場所を持っていないことも多いことが現状である。



(写真30) 焼成直後の製品を大通りで販売する

### 3 - 6 副業

新しい世代のクムハールカーストには、土器製作の手伝いをしながら、副業に従事する者が多く見られた。また土器製作に一切関わらず、仕立てや宝石磨きなどを本業としている者も多くなる。その理由として、土器製作だけでは十分な金額が得られないことや、雨季は土器製作ができないことがあげられる。ここでは、新

しい世代のクムハールカースト男性がどのような職業についているのかを見る。女性は、ほとんどの場合家事手伝いや土器製作の手伝いなどを担当しているため、男性のみを対象とすることにする。

【1】クムハールの長男・次男・三男が土器製作を行っている。四男・五男は土器製作を一切せずに、一年を通して収入が安定している宝石磨きをしている。

【2】のクムハールのステナライン クマールの長男(21歳)は、宝石磨きに出かける前にディーパック作りを2時間する。次男(19歳)は窯出し後に、品物を自転車で運ぶ手伝いをする。長男・次男とも時間が空いているときは、積極的に土器製作や販売の手伝いをしているようだ。周辺のクムハールカーストの青年達も、仕立屋、宝石磨きを副業としている場合が多かった。

【5】のクムハールの長男は教師、次男はブロックブリンティング、三男は宝石磨きを行っている。四男(推定18歳)のみがクムハールの仕事を父と共にこなしている。このほかにも、自分の家で食べる穀物も育てているという。一年間に使用するクムハール製品と引き換えに、農家から土地を借り、自分の家族分の農作物を作る yajamati system (traditionally fixed clientele)がある (Saraswati 1979)。ここクムハールが yajamati system のもとに、土地を借用して農作物を作っているのか、所有している土地を使用しているのかは分からない。

このように、新しい世代のクムハールカーストの者は、土器製作以外の仕事に従事していることが多い。上記の例をみても、息子のうち二・三人だけが土器製作に関わり、残りの息子が一年を通して収入が安定した仕事に従事するのが一般的なようだ。

### 3 - 7 経済状況

上記で述べたようにクムハールカーストが経済的理由で副業に従事をもつケースは少なくない。一般的にクムハールの生活は困窮していると言われる。雨期に製品を製作できないこと、製品の販売価格が安いこと、近年急速に広まったプラスチックや金属の使用がクム

ハールの土器への需要を減らす原因になっているという報告もある (Shantha Krishnan 1989)。ここでは、【1】のクムハールの経済状況を給料の振り分け方や、製品を土器専門店で販売したときの純利益について述べる。

【1】のクムハールのカリ・デービーと息子の間では、完全な分業と出来高制が成り立っている。カリ・デービーは材料購入・給料振り分けの金銭管理・材料の注文の一切を管理している他、息子たちが作ったヨーグルト入れの底面の仕上げや窯入れも行う。カリ・デービーの息子は製品の種類と数に応じて、カリ・デービーから給料を受け取る。例えば、息子はラッシーグラス100個につきRs30の支払いを受ける。

窯入れの責任はカリ・デービーにあるため、焼成で壊れた製品に対しても息子への支払いはなされる。

【1】のクムハールは、土器の製品を販売している店に、ディーパックが100個でRs10、タブキヤ(小さな壺)1個でRs4という価格で卸している。店頭では、クムハールが受け取る金額の約二倍の値段で販売されている。

実際に【1】のクムハールが、Rs200の土でRs0.7のラッシーグラス2000個を作り、土器の専門店で製品を売ったときの純利益について計算したら以下の通りになる。

材料費
土代 400kg(運び代を含めてRs200)
燃料代 (Rs300)
材料費でRs500になる。
専門店でラッシーグラスを1個 Rs0.7で売る
$Rs0.7 \times 2000 \text{ 個} = Rs1400$
純利益は、 $Rs1400 - Rs500 = Rs900$

息子はラッシーグラス100個につきRs30の支払いを受ける。2000個分のRs600が息子の収入になり、残り

のRs300 がカリ・デービーの収入となる。

400kgの土を3日で使い切ることもあるということだったが、土器製作は天候に左右されやすいのでヶ月にどのくらいの収入があるのかはっきりとした数字は分からない。また、製品を卸した店からの支払いの先延ばしや支払いの踏み倒しが多く生活が不安定になる一因となっているという。息子の一人に給料について尋ねたところ、自分、妻、子どもたちがやっと食べていけるだけしか貰っていないと答えていた。

#### 4. 考察

過去のクムハールに関連する文献と比較し、土器の整形法や焼成法に大きな変化は見られなかった。しかし、電動ロクロの導入、クムハール自身が新しくデザインした製品、マルカの装飾に対する意識の三点には注目すべきである。

電動ロクロで土器製作をするクムハールが、土器製作には使わなくなった手回しロクロを結婚式のチャック・プージャのために保管していた。この事例から、クムハールが伝統的に使用していたロクロのもつ儀礼的な意味(2章 神話を参照)を意識していることが分かる。電動ロクロの使用は重い円盤を回す労力や時間を省き生産の向上につながるが、値段の高さや古いものへの執着心が影響しているようで浸透はしていない。

また、新しい生活様式や変化する需要にあわせた製品を、クムハール自らがデザイン・製作しているのも事実である。

最後に、マルカに施される装飾に対するクムハールの意識と購買者の意識のずれ違いについて考えてみたい。水入れの第一の購入基準は、製品がよく焼けていることと壊れていないことだった(脇園 2003b)。購買者は水入れの機能性に重点を置き、水入れの絵付けをさほど気にしていない。これには、マルカの安さやマルカは数ヶ月で買い換えるものという意識が作用しているようだ。だが実際は、「もし水入れに絵付けがなされていなかったら、誰も購入しないだろう」という発言

から、水入れには絵付けがあって当然という意識が人々の深層にあることが分かる(脇園 2003b)。クムハールはこのような購買者の需要にあわせて絵付けを続けているのだろう。

#### 5. 結論

生活スタイルの変化や新素材の導入によって、クムハールの生活は大きな打撃を受けたと多くの文献で語られている(Sawaswati 1966 1979, Krishnan 1989)。しかし筆者は、新製品の開発などクムハール自身の工夫や人々の根強い宗教心が、クムハールの土器製作を支えているという印象を受けた。ヒンドゥー教徒が結婚式の一部として、クムハールを訪れロクロを崇拝する儀礼からもそれが分かるだろう。人々の宗教心が消えない限り、クムハールは社会にとってなくてはならない存在である。クムハールが作る製品が支持され続けると考える理由のもうひとつに、彼らの独特な自然観がある。クムハールが製作する土器製品、特に壺を通して見える自然観については論文bで詳しく語ることにする。

#### 註1 カースト

カーストはヴァルナとジャーティーに分けられる。ヴァルナとはブラーマン(司祭)、クシャトリア(王族・戦士)、ヴァイシャ(商人・農民その他)、シュードラ(農隷)の階級の枠組みである。各戸のカーストは自分たちの身分を保持するため、他のカーストとの接触を避けようとする。自分よりも低いカーストと接触はいかなるものでも不浄を引き起こすと考えられているからである(田中 1993)。

#### 註2 不可触民

上記の四つのヴァルナの外にあるものが不可触民である。アンタッチャブル、ダリット、ハリジャンと呼ばれることもある。1950年施行の憲法では不可触民制やカーストによる差別を禁止しているが、いまだに強い差別

意識が残っているのが現状である。不可触民は不浄とされており、宗教儀式に関わる仕事のほかに、動物死体や排泄物の処理などを仕事にする (Robert Delliège 1999)。

### 註3 ブルーポタリー (Blue Pottery)

ブルーポタリーは、青や黄色の鮮やかな色彩で彩られた陶器である。インドでは、主に海外向けの輸出品として製作されている。ペルシアに起源があるとされ13世紀頃にインドに伝えられた (Blue Potteries of Jaipur)。ブルーポタリーの製造は、石膏型が使用される本体づくり、デザイン、ペインティング、窯入れの4段階で成り立ち、複数の異なるカーストがブルーポタリーの製造に関わっている。そのアート性からかペインティングは上層カーストによってなされている場合もある。本体づくりには、仕事の類似性からクムハールが携わっていることが少なくない。

### 註4 オート・リキシャー

原付バイクの後部に座席をつくったもので、サイクル・リキシャーと並んでインドの代表的交通手段である。

### 註5 マルカ

マルカは土器の水入れである。マルカの中の水は気化熱で冷えるため、特に夏場に重宝される。マルカの水はおいしく健康によいと考えられていることから、冷蔵庫を所有する人々も、マルカを利用し続けている (脇園 2003b)。

### 註6 スワスティカ (Swastika)

まんじ。まんじは、すでに紀元前 2000 年頃のもヘンジョ = ダロを中心とするインダス文明に見られ、一般に座標軸が回転する様子を表現したものと考えられる。また、まんじの4本の腕の先端は、いずれも同じ方向に折れ曲がっているため、力動性をあらずと解釈す

ることもできる (ハンス・バーダーマン 1989)。

### 註7 Rs 175 ~ 200

日本円で約500円。インドの物価は日本の約10分の1とされており、Rs10が日本円で約25円に値する。調査地のジャイプルでは、バナナが1kgRs10~15、リンゴが1kgRs30で販売されていた (2003年8月調べ)。

### 註8 ラッシー

ヨーグルト飲料。土器の皿の中で牛乳を4~5時間寝かすと出来上がる。駅やキオスクなどでは、紙パックのラッシーが一般的だが、ジャイプルには、ラッシーを土器のラッシーグラスにいれて販売する専門店が多くある。土器のグラスの独特な匂いや素材が好まれている。ヒンドゥーの伝統によると、飲食に使用された土器は廃棄し二度と使用してはならない (Singh 1979)。今日でも、ジャイプルでは、ラッシーやチャイに使用されたグラスが道路に捨てられている。

### 註9 酸化焼成

十分に酸素を供給されている状態での焼成。土器作りの最も初期段階から酸化焼成は行われている。酸化焼成で土器が焼かれたとき、焼き上がりは総じて茶色系の色合いを呈する (佐藤 1983)。

### 註10 還元焼成

十分な酸素を供給されない状態での焼成。窯に火をいれ、ある程度温度が上がったところで、窯から空気を入れないようにする。燃料は煙だけで燃焼する (佐藤 1983)。

### 註11 チャパティー

発酵させてない平らなパンで、北インドの主食とされている。

### 註12 ディワリ (Diwali)

インドの3大祭りのひとつ、光のお祭り。2003年10月25日に行われた。富の女神ラクシュミー(Laximi)と幸運の神ガネーシュ(Ganesh)を家の中に招き入れるために行われるといわれている。夜になるとこの祭りの主役として土器のディーパックが使用される。家の中や屋上を数百個のディーパックで飾り火を灯し、歌をうたい、踊り、花火をする。ディワリの時には、ディーパックに油を注ぎ、綿花を細くよったものを皿の淵に寝かせ火を灯す。

#### 謝辞

拓殖大学の坂田貞二先生は、インドの土地に慣れる第一歩を手助けしてくださいました。はじめてのフィールドワークも坂田先生のご指導で成し遂げることができましたとっております。

ジャイプルの Mohan Ji とご家族は、私を家族の一員として受け入れてくれました。インドにもう一つの家族ができたようでとても嬉しいです。ジャイプルのクムハールのみなさんもいつもあたたかく迎え入れてくれてありがとうございました。なかでも Kari Devi は、いつも笑顔で迎えてくれておいしいチャイをご馳走してくれました。老いた細い体でハードワークをこなす姿やおいしいそうにタバコを吸う横顔が印象に残っています。

デリーの Nehru Memorial Library は、クムハールに関する貴重な文献を提供してくださいました。

インドでお世話になった皆様、必ずまた会いに行きます。

論文の作成にあたっては、ご指導して下さった竹川大介教授に感謝いたします。今田文さまには地図製作にあたり多大な援助をいただきました。ゼミ生のみなさまには、最後までお世話になりました。

皆様のご厚意に深く感謝いたします。

#### 参考文献

APPLETON, HELEN (edi)  
DO IT HERSELF: Women and technical innovation,

Intermediate technology publications, 1995

バーダーマン、ハンス

図説 世界シンボル事典、八坂書房、1989

Datta, Veena

CHALCOLITHIC POTTERY PAINTINGS: with special reference to Central India and Deccan, Sharada Publishing House, DELHI, 2000

Krishnan, Shantha

Traditional potters: entitlements and enablements of artisans, Indus Publishing Company, New Delhi, 1989

三井秀樹

形とデザインを考える 60章: 縄文の発想から CG 技術まで, 平凡社, 2001

Saraswati, Baidyanath

Pottery-making cultures and Indian civilization, Abhinav Publications, 1979

Pottery techniques in Peasant India, Anthropological Survey of India, 1966

佐藤雅彦

やきもの入門, 平凡社, 1983

鹿野 勝彦

『ベンガル農村のクムハール土器づくりカースト: バングラデシュ, タンガル県ルミザプール郡の事例から』 p 103~123 民俗学研究 1987. 9

関根光宏

『インド西ベンガル州における土器およびその製作技術』 p32~53 物質文化 2001



Robert Delliege

The Untouchables of INDIA, Biddles Ltd, Guildford,  
1999

Sharma, M.L (edi)

CASTE and CLASS in Agrarian Society, Ajanta  
Publications, 1985

Singh, Gurcharan

Pottery in India, Vikas Publishing House PVT LTD,  
1979

田中 雅一

『南インドの寺院組織と司祭たち：自立への志向と相互依存』 p111～ インド=複合文化の構造、長野泰彦・井狩彌介(編), 法蔵館, 1993

Blue Pottery of Jaipur: study sponsored by the appropriate technology unit department of industrial development ministry of industry government of India, National Productivity, New Delhi, 1983

People of India national Series Volume 2 the Scheduled Castes Revised Edition, Oxford University Press, 1995



(写真15) 地面に燃料の牛糞を並べる (Ramberg Bazaarにて)



(写真16) 敷き詰めた牛糞の上に、製品を置く (Ramberg Bazaarにて)



(写真17) 中心部にガラスで煙突を作り、その周りにさらに平皿やグラスを置く (Ramberg Bazaarにて)



(写真20) 窯全体を牛糞でカバーする (Ramberg Bazaarにて)



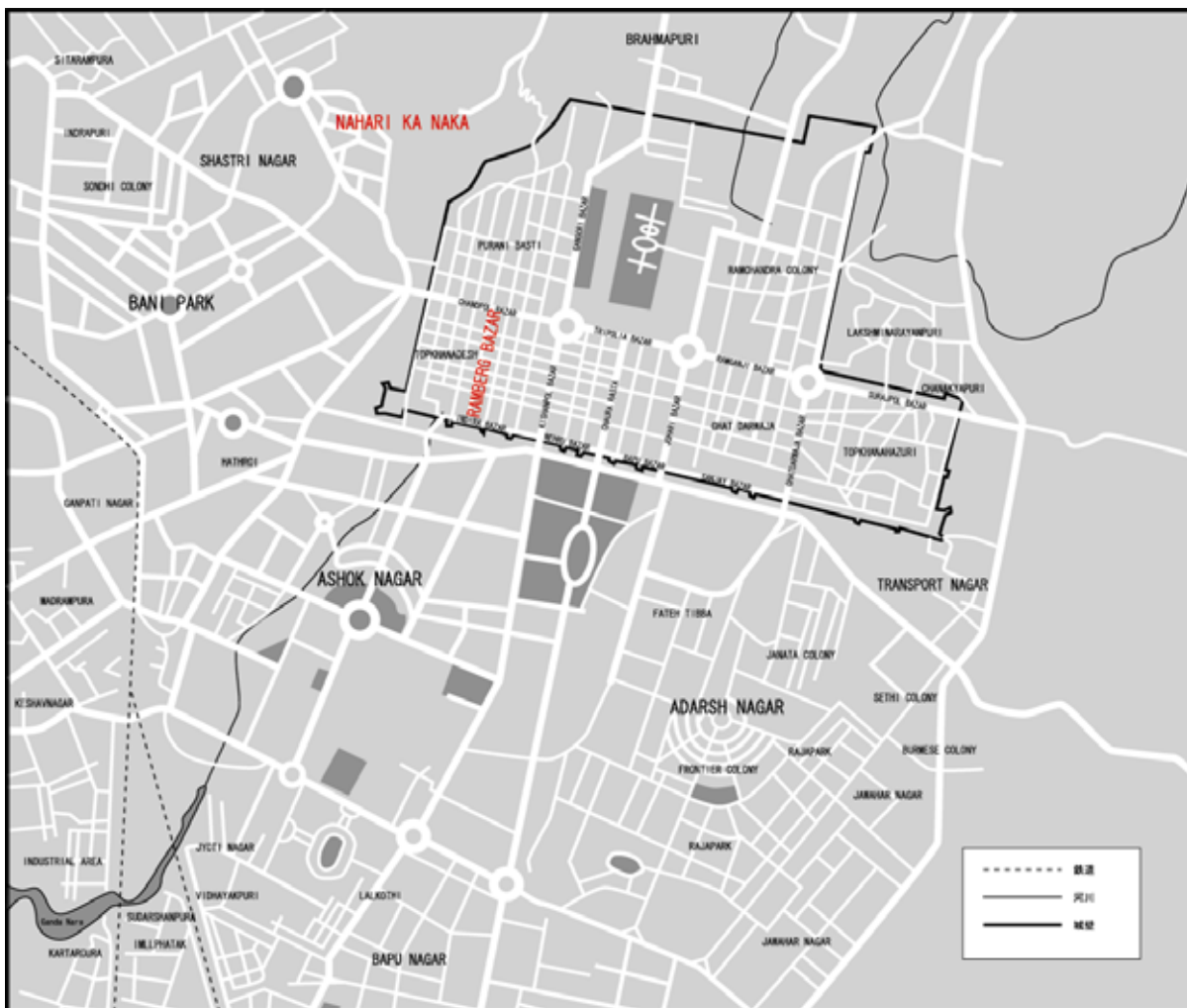
(写真19) 火をつけた牛糞を、窯の中心部に入れる (Ramberg Bazaarにて)



(写真21) 熱を逃がさないようにアルミ製の板で窯全体をカバーする (Ramberg Bazaarにて)



(写真 22) 3つの窯の鳥瞰図 (Ramberg Bazaar にて)



(図 1) インタビューを行ったクムハールの分布図



(図2) [4]のクムハールが住むAmer Roadとジャイプルの位置関係

	クムハールが住む通りや地域	周辺の様子と家族構成
[1]	Nahri Ka Kanka	ジャイプルの旧市街地の北部に住む。人通りが多いNahri Ka Kankaから細い道に入ったところに位置し、周辺は住宅が集まっている。裏庭で製作を行っているが、庭が火葬場と繋がっている。カリ・デービー(Kari Devi推定55~60歳 女性 夫と死別)には7人の子供がいる(長男36歳、次男35歳、三男33歳、長女25歳、次女23歳、四男20歳、五男19歳)。すでに長女と次女は結婚し、それぞれの夫の家族と暮らしている。同居しているのは、長男・次男・三男とそれぞれの妻とその子供たち、四男・五男である。長男・次男・三男は、母親であるカリ・デービーのもとで土器の製作に従事
[2]	Ramberg Bazaar	ジャイプル旧市街内にあるRambergBazaarは、金属加工の店が立ち並んでいる道の一角にある。土こね・ロクロ作業・窯が複数作れる空間があり、そのまわりをクムハールの家が囲んでいた。 密集して約17人のクムハールが住んでいるが、その中の一人であるステナライン(Satya Naiean Parypat 45歳 既婚男性)は、約6年前に政府から配給されたエンジンを利用してジャイプル市内からバイクでおよそ1時間30分の山中にある村である。この村には少なくとも3世帯のクムハールが住んでおり、土器を作り続けている。ここは材料調達には立地条件がよく、すべての材料は近郊で手に入る。
[3]	Jai Singh Pura Khor	ジャイプル市内からオートリキシャー(註4)で約1時間の距離にある。この村には、約26人のクムハールがいるようだ。ここで作られたマルカ(註5)が、[2]のRamberg Bazaarのクムハールによって販売されている。マルカ作りが中心に行
[4]	Amer Road	ジャイプル旧市街から南へ約11kmに位置する。ここはブルーボタリーが生産されていることで有名な土地である。村の人によると、ブルーボタリーの技術者がブルーボタリーの技術を後継する人材を育てるために、安全な水の確保、家の提供などの村づくりをおこなったのが始まりである。もともとクムハールの数が多かったことから、ブルーボタリーの担い手が豊富と考えられこの土地が選ばれたようだ。今でも複数のクムハールが住んでいる。今回訪れた村のクムハール(推定60歳)と四男(推定18歳)は電動ロクロ

(図3)ジャイプルのクムハール5世帯の説明

クムハールの名前と年齢	使用した燃料	主な製品
サテナライン・クムハール・プレジャパティ- (38歳)	牛糞	ミルクグラス、ボウル ディーパック 貯金箱 ラッシ-グラス
ガシラ・クマール(推定60歳)	新聞・廃材・古着	貯金箱,皿,ディーパック
モティラム・クマール(55歳)	新聞・廃材・古着	子どもの玩具,ラッシ-グラス中

(図3) [2] Ramberg Bazaarのクムハール名前と使用した燃料

名前	製品の説明	値段
チュラ Chula	コンロ	Rs 20
タワ Tawa	チャパティ - (註11)用フライパン	Rs 5
カラス Kalash	結婚式用ポット(カラスを3つ重ねたものはジュゴルと呼ばれる)	Rs 4・5・11(サイズによって異なる)
バズーラ	カラスのふた	カラスとセット
ジャハール	大きめのマルカで白の絵が施されているもの	Rs 40
ラールマッカ Matka	<u>大きめの</u> マルカで金と赤の模様が施されているもの	Rs 15
チョーターマッカChhota Matka	小さめのマルカで金と赤の模様が施されているもの	Rs 15
マンガ	より小さいマルカで金と赤の模様が施されているもの	Rs 5
パデラル	大きめのプレート牛乳をいれて約4時間でヨーグルトが出来上がる。	Rs 15 大きめのものはRs 20
ウーディーチョーティ-ラル	小さめのプレート	
チラム Chilam	タバコ用のパイプ	Rs 2・3(サイズによって異なる)
ウッカ	タバコ用	
メルチャンマ	靴磨き	Rs 4
スライ Surahis	マルカと違って水差しと採取っ手がついている。スペースの問題がある時に重宝される。	Rs 4
ディーパック Diipak	灯り用の入れもの	100個でRs20
クンディ Kundi	ボウル	
ゲーラック Gullak	貯金箱	サイズによって異なる